

2025.11.11 環境研究機関連絡会

ヴィンヤードにより維持される生物多様性 とネイチャーポジティブ

Biodiversity maintained by vineyards and Nature Positive

農研機構 楠本 良延



農村の生物多様性に注目が集まっている

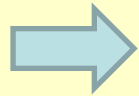
生物多様性条約 COP10

2010年10月、名古屋市で開催



愛知ターゲット(2020年目標)が採択

Target 7: 2020年までに、**農**(林水産)**業が行われる地域が**、
生物多様性の保全を確保するよう**持続的に管理**される。



残念ながら、ほぼ、未達成に終わり、課題が多く残された！

生物多様性条約 COP15

2022年12月、カナダで開催

昆明・モントリオールターゲット(2030年目標)が採択

30年までに自然の損失を止めてプラスに転じる「ネイチャーポジティブ」
の達成のため23の目標が決定

1) 生物多様性の重要地域の損失をゼロに、2) 劣化した生態系の**30%の回復**3) 2
復陸と海の**30%の保全(30by30)**、……………23)……………。

生物多様性による日本ワインの高付加価値化

●農研機構と麒麟HDの共同研究

目的：ヴィンヤードの生物多様性を評価し、草原の生態系を守り、
CSV※として活用していく

※ 社会と共有できる価値を創造し経済的価値が伴う活動。

CSVモデル

日本ワインとブドウ畑



地域の
課題

・遊休荒地拡大
・雇用喪失



メルシャンの
課題

・日本ワイン拡大
・国内ブドウ畑拡大

マーケティング力と知識・ノウハウ・ネットワーク



・遊休荒地を
ブドウ畑へ転換
・ワイナリー新設

地域

環境



・ブドウ畑生態系調査
・植生再生活動

日本ワインのヴィンヤードの持つ豊かな生物
多様性を見える化

→ テロワールと関連付ける！



・地域活性化
・雇用拡大



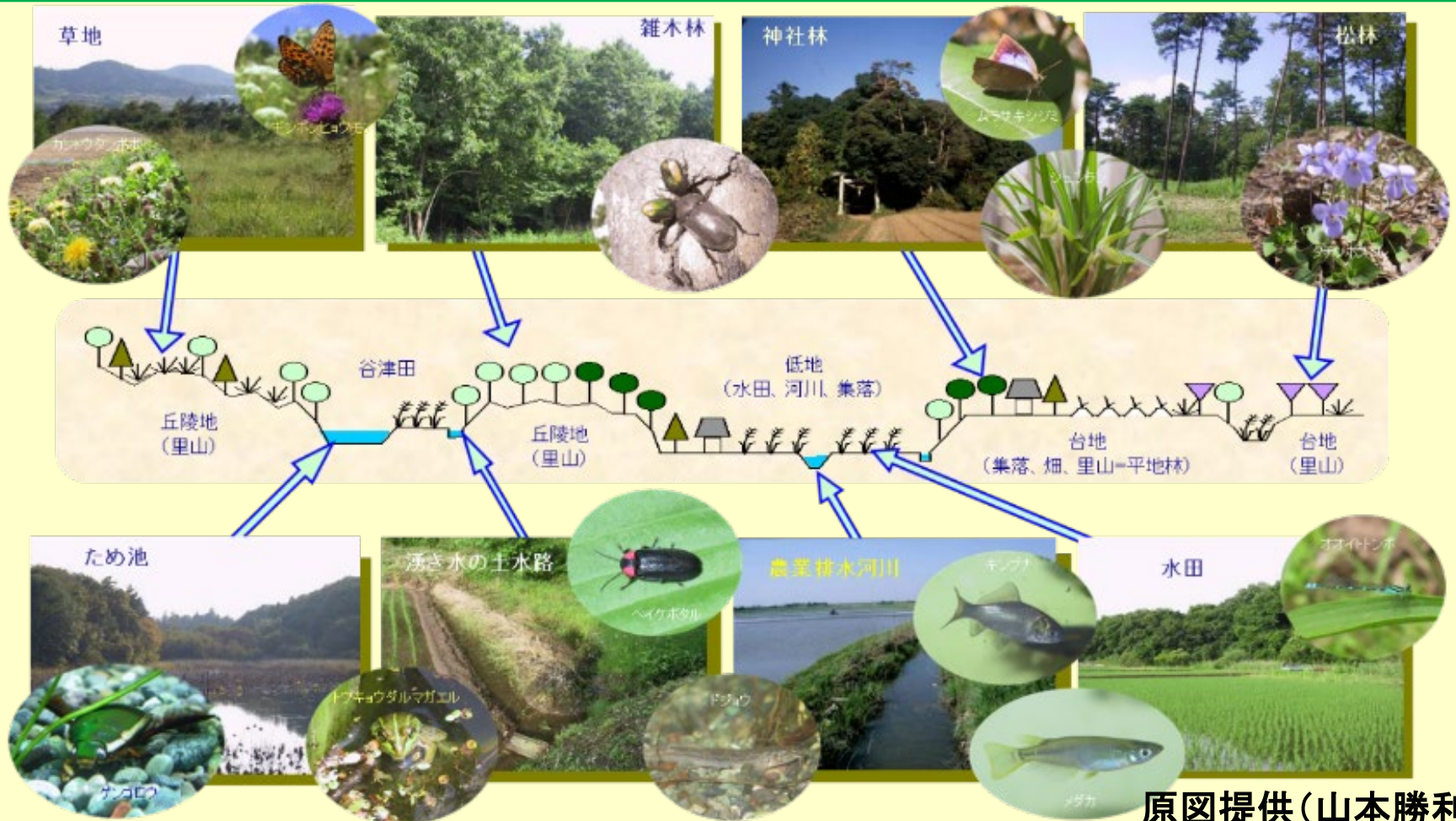
・日本ワインでのリーダーシップ
・高付加価値商品の拡大

社会と共有できる価値を創造

生物多様性で日本ワインの高付
加価値を狙いながら、社会貢献
により企業イメージ向上も達成で
きるモデル

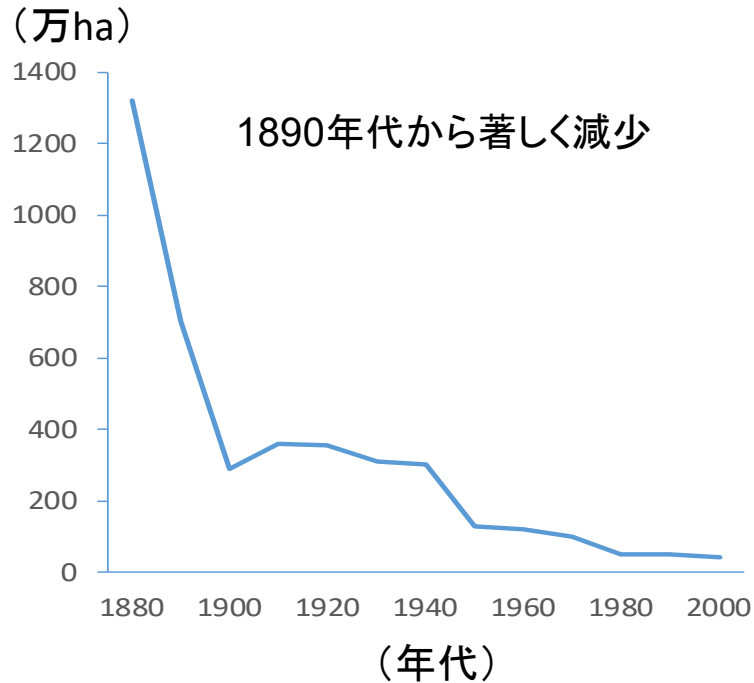
農村の生物多様性は人間による働きかけが重要

- 農村には様々な自然環境が形成されている。
 - －生態系の多様性高い→種の多様性が高い
- それらの自然環境は、人間によって維持管理されてきた二次的自然

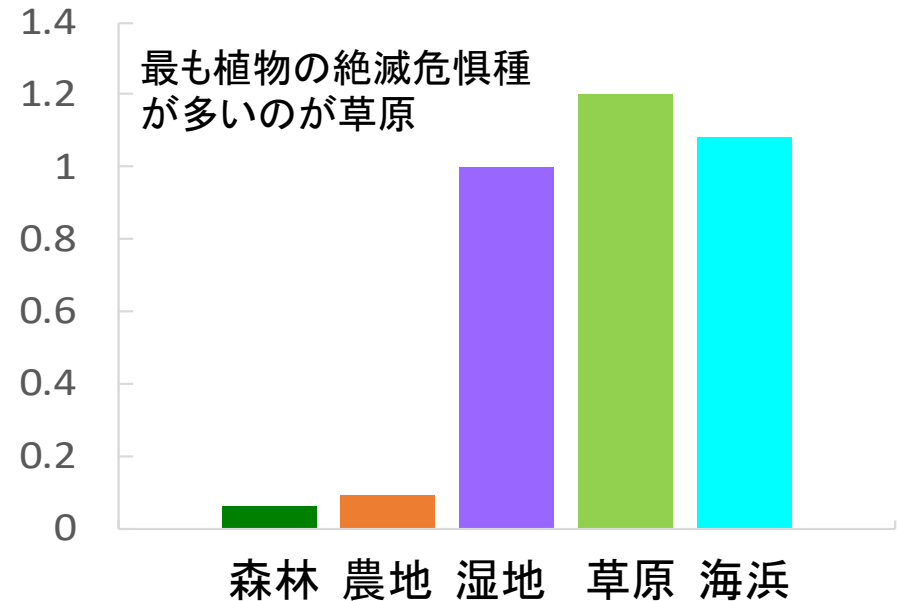


原図提供(山本勝利氏)

減少する日本の草原



※林野面積累年統計、農林省統計表、
農林水産省統計表より集計



※1haあたりの絶滅危惧植物
西日本草原研究会(2007)より

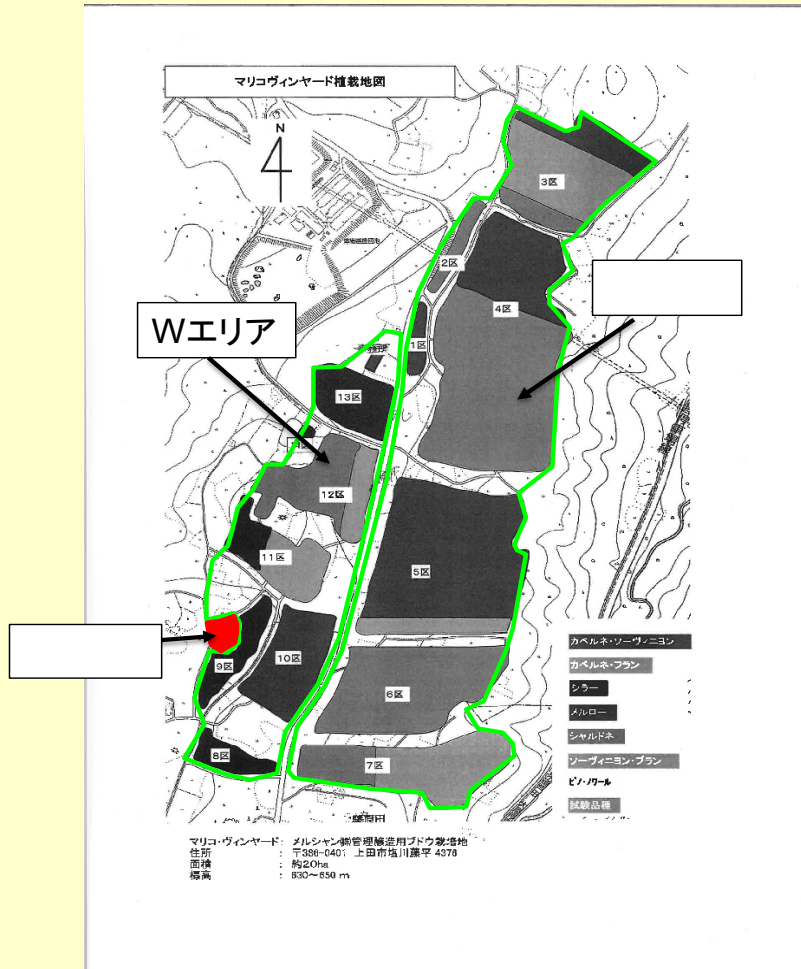
草原の危機

わが国の草原面積が大きく減少
国土の30%（1880年代）→1%

戦後、最も減少した自然環境は草原！
草原に生息する生物が絶滅の危機に瀕している！

ヴィンヤードにおける生物多様性調査

※麒麟HDとの共同研究 2015-現在まで



生態系調査により、**昆虫168種**、**植物288種**および**希少種**を確認。

梔子ヴィンヤード(長野県)及びその周辺の生物多様性

※麒麟社との共同研究 2015-現在まで



ヴィンヤードの垣根栽培がポイント



クララ(オオルリシジミの食草)



メハジキ(希少種)



スズサイコ(国レベルの絶滅危惧種)



キスゲ(草原の指標種)

昆虫類(梔子ヴィンヤード調査結果)

- チョウ類は2022年6月に16種、7月に29種、合計35種が確認された。
- 2015年と2022年の結果を合わせると、チョウ類は40種が確認された。
- 希少種として、ウラギンスジヒョウモン(環境省VU)、オオムラサキ(環境省NT)、キマダラモドキ(環境省NT、長野県NT)、ヘリグロチャバネセセリ(長野県NT)が確認された。
VU: 絶滅危惧Ⅱ類、 NT: 準絶滅危惧
- チョウ類以外では、2015年にベニモンマダラ本土亜種(環境省NT、長野県NT)が確認された。



1. 鳥類相の把握

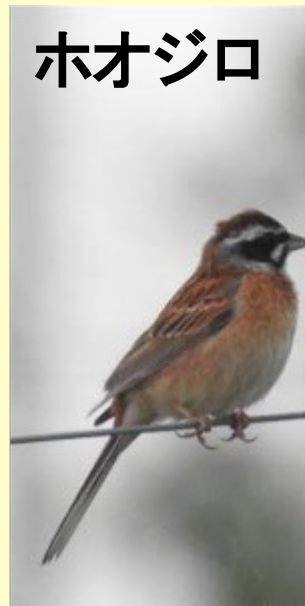
2019・2020年の春～夏

早朝に約2kmのコースを
歩いて観察した種を記録

合計23種の生息を確認



ヒバリ



ホオジロ



キジ



シジュウカラ

ヴィンヤード内で繁殖する種



ヒバリ

全長17cm(スズメより少し大きい)

雑食性(植物の種子や虫など)

地表(主に草の根元)に営巣



ホオジロ

全長17cm

昆虫食鳥類で果実は食べない

ブドウの枝上に営巣を確認

どちらの種も日本では数が減っており、保全の必要性高い

クモ類(特筆すべき種)

タソガレトンビグモ (ワシグモ科)

Phaeocedus braccatus



2021/6/11に採集。

国内4個体目となる極めて珍しい種

成果物

馬場友希 2022 タソガレトンビグモの日本4例目の記録. ニッチェライフ. 9:91-92.

馬場友希 2023 梔子ヴィンヤードで採集されたクモの追加記録 Kishidaia123.149-150

ワスレナグモ (ジグモ科)

Calommata signata



2021/10/5 ブドウ園で巣を発見

2022/9/22に徘徊中のオスを採集

環境省RDB 準絶滅危惧種 (NT)

城の平(山梨県)ヴィンヤードの生物多様性

※麒麟社との共同研究 2015-現在まで

面積は狭いがメルシャンの最も歴史あるヴィンヤード。ブドウ畑の面積は1ha、管理している周辺環境は3ha程度。



城の平ヴィンヤードにおける生物多様性

ヴィンヤードには植物種204種の多様な生物多様性を維持している。



イチヤクソウ



センニンソウ



ナガバノコウヤボウキ



ウメバチソウ



キキョウ



シュンラン



コウゾリナ

城の平ヴィンヤードにおける生物多様性

ヴィンヤードには植物種204種の多様な生物多様性を維持している。



ノコンギク



ノブドウ



ヒキヨモギ



マキエハギ



マルバハギ



マルバヤハズソウ

放棄地をヴィンヤードに転用すると どうなるのか？

天狗沢ヴィンヤードの生物多様性

造成前(2016年)から造成後(2018-2022)に年1回の
生物多様性調査を実施。

天狗沢ヴィンヤードの調査結果

50地点のコドラート植生調査

造成前：シカ食害による著しく多様性が低い植物相



チカラシバやアメリカオニアザミが優占する植生（シカが食べることができない）
チカラシバ群落（平均出現種数1.5種）、アメリカオニアザミ群落（平均出現種数2.5種）

造成後：一年草群落から多年草群落に変化（出現種数が増加！）



2018年
43種

（一年草中心）

2019年
78種

（一年草＋多年草）

2020年
88種

（多年層の増加）

2021年
103種

（多年草の増加）

2022年※
108種

（多年草の増加）

※楠本ら未発表 17

天狗沢ヴィンヤードの調査結果



草原性の指標種であるネコハギ、チドメグサ、ノガリヤスが増加



希少種のイヌゴマも定着！



シカ柵の効果大

ヴィンヤードの草原化は順調！

昆虫類 天狗沢調査結果 (1)種数

表 1 天狗沢ヴィンヤードで確認したチョウ類種数

調査年	5月	6月	7月	9月	Total
2016			13		13
2018	6	6	7		13
2019	3	10		12	18
2020			16	13	19
2021	10	14	15	16	28
2022	9	13	18	18	30

* 2019年4月, 2020年10月および2021年8月の結果は省略.

天狗沢

ヒョウモンチョウ類



ウラギンヒョウモン※

※ヤマウラギンヒョウモン、サトウラギンヒョウモンのどれか未同定



ミドリヒョウモン

2020年まで



ウラギンスジヒョウモン
絶滅危惧Ⅱ類(環境省RL)



クモガタヒョウモン
全国的に減少傾向

2021、2022年:2種加わった

COP15においても経団連を代表して発表



30by30 自然共生サイトに選ばれる

2023年に梔子ヴィンヤード、2024年に城の平ヴィンヤードが認定

https://www.kirinholdings.com/jp/newsroom/release/2023/0113_06.html

「生物多様性のための30by30アライアンス」で「梔子ヴィンヤード」が自然共生サイトの認定相当に選定

～生物多様性保全に貢献する場所(OECMs※1)への認定を目指すことで、生物多様性保全エリアの拡大に貢献する～

CSV

印刷

2023年1月13日

キリンホールディングス株式会社

キリンホールディングス株式会社(社長 磯崎功典)は、環境省による自然共生サイト※2の後期実証事業に昨年度参加し、メルシャン株式会社(社長 長林道生、以下メルシャン)の「シャトー・メルシャン 梔子ヴィンヤード」(以下梔子ヴィンヤード)が自然共生サイトの認定相当として、2023年1月13日に選定を受けました。

環境省は、2021年6月のG7サミットで合意された「G7 2030年 自然協約(G7 2030 Nature Compact)」に基づく「30by30※3」の目標達成に向け、民間や自治体などが所有している生物多様性の高い地域を自然共生サイトとして認定するための認定実証事業を行っています。2023年からは、自然共生サイトの国内認定制度の正式運用が開始される予定であり、自然共生サイトとして正式に認定されれば、国際データベースであるOECMsにも登録される予定です。

・優れた自然が残る地域として国際データベースに登録された



地元小学校の環境教育として活用



図. 2021年9月3日にオンライン授業とクララ育苗の様子



図. 2022年6月3日にVYに移植



図. 生徒の皆さんからの感想文

梔子ヴィンヤードが地域における環境教育の場として機能してきた。
→CSV活動の理想形の一つ **2024環境省・環境教育実践ESD動画に選出**

これからの自然保全活動にCSVは有効



CSR: Corporate Social Responsibility

⇒企業の社会的責任

CSV: Creating Shared Value

⇒共通価値の創造

里山の生物多様性保全に対しさまざまな可能性がある。

まとめ

- ・日本ワイン用ヴィンヤードは良好な生物多様性を保全している。
→ワイン生産と生物多様性が両立している！
- ・植生回復の試みも良好！地域の環境教育の場としても最適。
- ・CSV活動を通じた生物多様性保全の良好な事例として評価できる。
- ・ネイチャーポジティブの良好な事例である。